

タイ王国及び他の東南アジア諸国の経済・産業動向、社会動向報告書

2016年10月

こんにちは。鳥取県東南アジアビューローの辻です。

日本でも大きく報道されましたが、10月13日にタイのプーミポンアドゥンヤデート国王陛下（以下、プーミポン国王）が崩御されました。1946年に18歳の若さでラマ9世として即位され、以来70年の長きに渡り広くタイ国民に尊敬され、非常に多くの支持を集めてきました。世界的にも「最も在位の長い君主」として、また「最も尊敬を集める王様」として知られています。日本の皇室との縁も深く、2006年6月にプーミポン国王の即位60周年を祝う祝賀行事が国を挙げて執り行われた際には、日本から天皇皇后両陛下も参列され、国王の即位60年を祝いました。

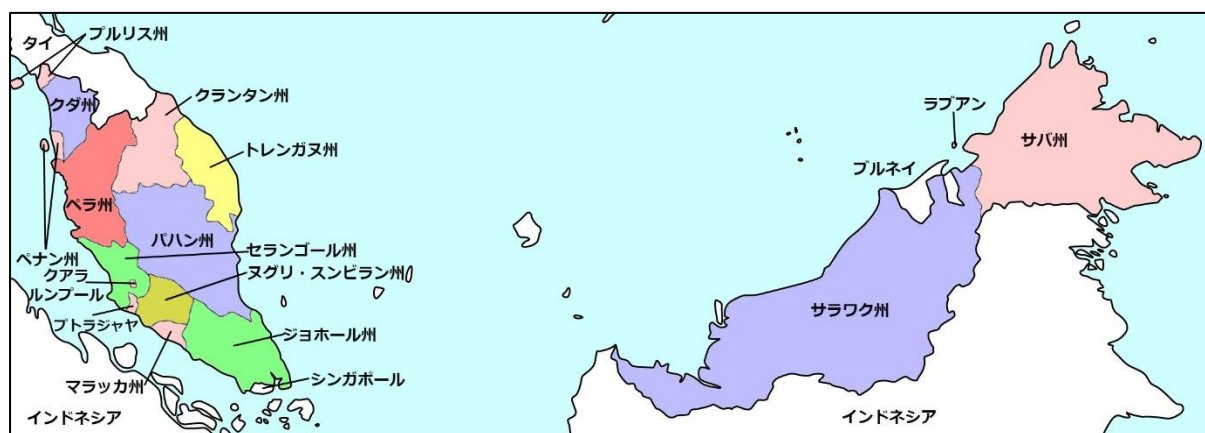
プーミポン国王を「父」と呼び、尊敬してきたタイの人々は悲しみに暮れ、政府は服喪期間を政府関係機関については1年間、一般国民には30日間の娯楽自粛や適切な行動を求める声明を出しました。外国人観光客に対しても、タイ観光庁から「寺院などの観光地のみならず、外出の際には悪目立ちを避けるためにも落ち着いた色（黒・灰・白など）の服装を」と礼節をわきまえた行動を求めています。しかしながら、当初は自粛のため中止と見られていた国内の祭事・伝統行事も、30日間の自粛期間後には内容をおとなしめのものに一部変更して行われることが決定するなど、タイ政府は必要以上の自粛をして観光産業に大きな打撃が出ないように呼びかけています。タイへ観光・出張でこられる方はご注意ください。

プーミポン国王陛下のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。



タイ国内の各官庁・企業はHPで哀悼の意を表した
(タイ内務省HPより)

先月まではASEANの中で比較的経済開発の遅れたカンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナムの4カ国（CLMV）を取り上げてきましたが、今月はタイと並ぶ工業国のマレーシアについてご紹介させていただきます。



マレーシアの地図

タイ王国及び他の東南アジア諸国の経済・産業動向、社会動向報告書

2016年10月

【マレーシア基本情報】

データ出所：JETRO

1. 正式国名：マレーシア (Malaysia)
2. 人口：3,099 万人 (2015 年)
3. 国土：33 万 290 平方キロメートル (日本の 0.89 倍)
4. 首都：クアラルンプール
5. 気候：熱帯雨林気候
6. 民族：マレー系 (約 67%)、中国系 (約 25%)、インド系 (約 7%) ※マレー系には中国系及びインド系を除く他民族を含む)
7. 宗教：イスラム教 (連邦の宗教) (61%)、仏教 (20%)、儒教・道教 (1.0%)、ヒンドゥー教 (6.0%)、キリスト教 (9.0%)、その他

◇◆◇マレーシアの経済概況と日系企業の進出状況◆◆◇

経済概況	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年
実質 GDP 成長率 (%)	7.4	5.2	5.6	4.7	6.0	—
1 人当たり GDP (USD)	8,926	10,260	10,633	10,814	11,055	9,560
失業率	3.3	3.1	3.0	3.1	2.9	3.1
消費者物価上昇率 (%)	1.7	3.2	1.7	2.1	3.1	2.1

(データ出所：CEIC、統計局)

「ビジョン 2020」という長期計画を基に、2020 年の先進国入りを目指すマレーシア経済はリーマン・ショックで一時的に落ち込んだものの、経済成長率は堅調に推移しているといえます。直近は一時期の急成長は見られないものの、GDP 成長率は 4% 台後半～6% を維持しており安定しています。ただし、2015 年後半に入るとマレーシアの経済は、政情不安、原油安 (マレーシアは産油国)、中国経済の減退感、新消費税の導入、リングギット安などにより好調とは言えない状況になりました。製造業を中心とした産業で発展してきたマレーシアにとって、上記のような理由による景気減退は大きな構造転換を図る必要を強いる可能性があると言えます。

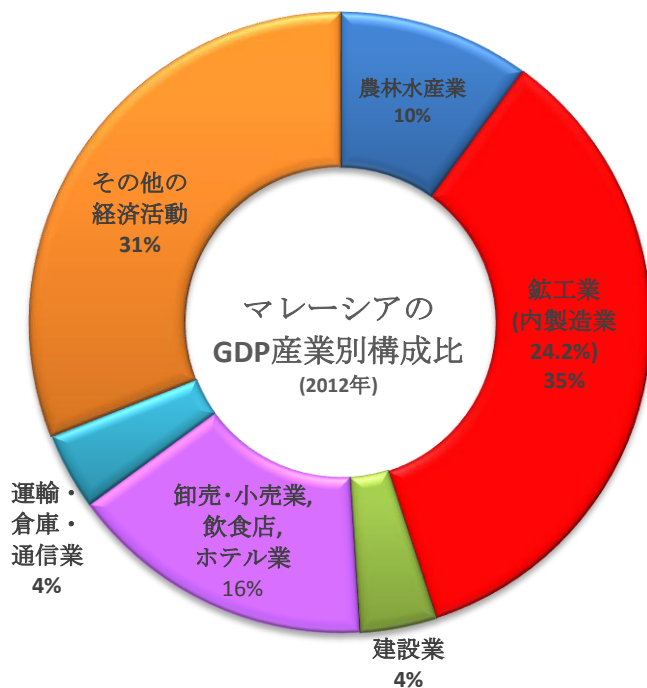
一方で、1 人当たり GDP を見ると 1 万ドルを越えており、シンガポールを除く ASEAN 諸国の中で一番高い水準となっています (タイの約 2 倍)。そのため、人口は 3,000 万人程度と大きくはありませんが、製造業の基地としてだけでなく首都クアラルンプールを中心に消費市場としても注目を集めています。ただし、マレーシアの釣鐘型に近い人口ピラミッドを見た場合、このままいくと比較的早い時期に成長が鈍化することも考えられます。



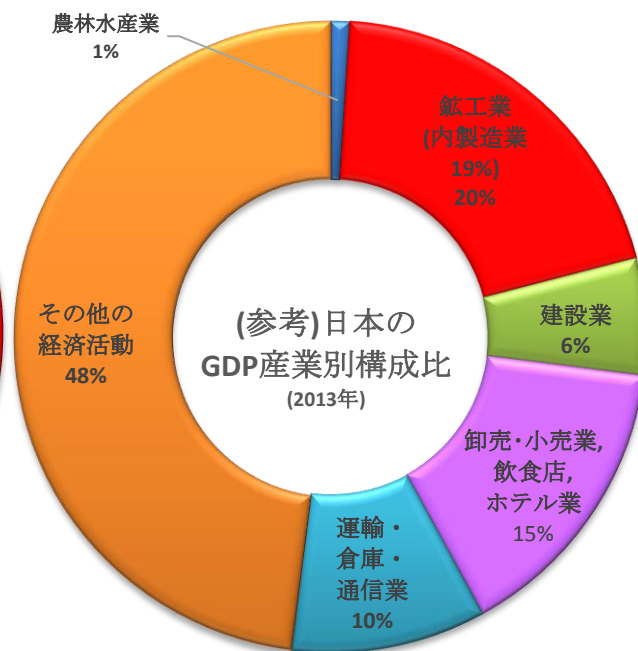
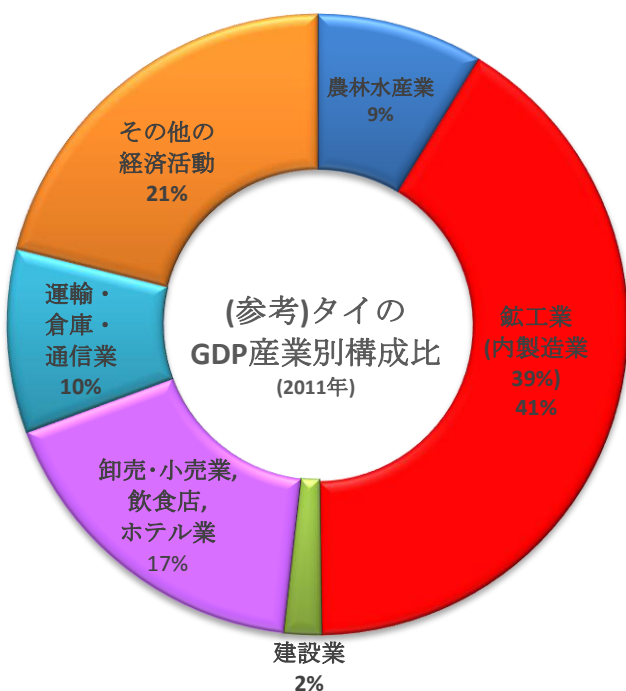
首都クアラルンプールの夜景

タイ王国及び他の東南アジア諸国の経済・産業動向、社会動向報告書

2016年10月



マレーシアの産業を見るとやはり大きいのはタイ経済と同様、鉱工業であり、全体の35%を占めています。そのうちの製造業の割合は大きく24%となっており、電気・電子産業や自動車産業を中心とした工業への依存度が高い経済であると言えます。ただ、こちらもタイと同様に最近のサービス業の占める割合も大きくなっていることから人々が豊かになり、市場としての魅力が増していることが伺えます。



データ出所：国際開発銀行

タイ王国及び他の東南アジア諸国の経済・産業動向、社会動向報告書

2016年10月

外資企業の主な進出形態：

近年、成長著しいASEANの主要国の中で、もっとも短期間のうちに農業国から工業国への転換に成功した国のひとつがマレーシアです。天然資源に恵まれ、スズやゴム、パーム油など第一次産品の輸出に依存した経済構造だったマレーシアは1970年代から外資の積極的な導入によって製造業が成長し、88年には製造業の比率が農林水産業を上回り、ASEAN有数の工業国としての地位を固めています。2013年のマレーシアに対する直接投資の国・地域別金額で日本は投資額はトップであり、毎年安定的にマレーシアに投資を行っています。2012年時点で日系企業の製造業と非製造業の割合はほぼ同じになっており、年々非製造業の割合が伸びています。製造業については、電気・電子、石油・化学薬品、鉄鋼・非金属、自動車・関連部品のようなかつての日本の重厚長大産業が全体の7割弱を占めます。一方で非製造業は、代理店・サービスをはじめ、貿易・商社、建築・土木の他に様々なサービス業が進出し、今後ますます非製造業の割合は増えていくと考えられます。

1. 製造業

電気・電子産業は工業国マレーシアを象徴する主要製造業のひとつで、アメリカのインテルをはじめとして、日本のパナソニック、日立製作所、東芝といった世界的な企業がマレーシアに拠点を置いています。自動車メーカーも欧米からはフォルクスワーゲン、GM、フォード、日本からはトヨタ、日産、ホンダ、マツダ、三菱、いすゞ、スズキ、ダイハツ、日野などの主要メーカーが進出を遂げています。

2. サービス業

工業化の成功によって、マレーシアでは中間所得層が拡大し、民間消費も増加の一途をたどっています。スマートフォンやタブレットが急速な勢いで普及し、家電では電子レンジや食洗機といった商品が人気を呼び、消費意欲は旺盛です。日本からはイオン、伊勢丹、ユニクロを展開するファーストリテイリングや無印良品の良品計画、ミスタードーナツを展開するダスキンといった小売業・サービス業が相次いで進出しています。

鳥取県東南アジアビューロー Tottori-Southeast Asia Trade and Tourism Bureau
担当：辻 三朗 Saburo Tsuji
Address:1 Glas Haus Building, 12 FL., Room 1202/C, Soi Sukhumvit 25, Sukhumvit Rd.,
Klongtoey-Nua,Wattana,Bangkok 10110
Tel : +66-(0)-2-260-1057
Mobile : +66-(0)-86-358-7298
Mail : tottori@aapth.com

当拠点の運営法人（鳥取県より業務委託）

■アジア・アライアンス・パートナー・ジャパン株式会社 <http://www.aapjp.com/index.html>

タイを中心に、ベトナム・インドネシア・インド・メキシコにて主に日系中堅・中小企業様の海外進出や進出後の会計税務法務を中心とした運営支援業務を行っております。